

博士学位論文審査要旨

2011年7月21日

論文題目： アフリカ問題 - 開発と援助の世界史

学位申請者： 平野 克己

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 峯 陽一

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 内藤 正典

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 小山田 英治

要 旨：

本論文は、学位申請者平野克己氏のこれまでの研究者生活の集大成として、迫力ある作品に仕上がっている。第1章と第2章は、戦後の開発援助の成立を跡づけ、「アフリカ問題」が開発援助の中心問題として浮上するに至る経過を描き出している。第3章と第4章は開発経済学の手法で問題に切り込み、農業問題とりわけ穀物生産性を重視しつつ、農工連関の観点からアフリカの低成長を説明しようとする。第5章と6章は、近年の一次産品輸出によるアフリカの成長と中国の存在感の大きさをふまえ、相互利益の追求と官民連携の観点を押し出しつつ、ビジネス・イノベーションに学びながら援助政策の転換を展望しようとする政策論である。

本論文の特質を5点指摘しておきたい。第1に、歴史学や地域研究の知見、とりわけ戦後の開発思想史を踏まえることで、叙述に厚みが生まれている。第2は、細やかな実証である。アフリカ諸国では統計資料があまり整理されていないが、筆者は包括的なマクロ統計の年次変化を鳥瞰図的に分析することで、アフリカ経済の変容の本質を明らかにしている。開発経済学の手堅い手法を踏まえながら、豊富で見やすいグラフによって、アフリカ経済の歴史的な特質と現状を縦横に明らかにしている。第3の特質は、工業化すなわち近代化であると見なす通説に反し、農業の基軸的な重要性を重視する姿勢である。「リカードの罨」をめぐる19世紀古典派経済学の問題意識に回帰しつつ、農村の富裕化を経済発展の鍵とみなす視角が、本書全体を貫く大きな問題意識になっている。そこでは、革新的農業をコアとする地域的市場圏の形成が重視される。

第4は実践的な政策論を提示していることである。本論文の末尾において、筆者はJETROでの実務経験で得た豊富な現場の経験をふまえて斬新なODA改革論を提案しているが、それをアフリカ経済の理論的、思想史的考察と結びつけることによって、「政策科学としての援助論」に昇華させている。第5に、アプローチの包括性が挙げられる。開発経済学、地域研究、経済思想史、国際関係論、マネジメント論など、本論文は多彩な学問の知見に依拠しながら、今日のアフリカ開発問題の全体像を浮かび上がらせることに成功している。まさに総合学としてのグローバル・スタディーズにふさわしい業績だと言える。

以上より本論文は、博士(グローバル社会研究)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

学力確認結果の要旨

2011年7月21日

論文題目： アフリカ問題 - 開発と援助の世界史

学位申請者： 平野 克己

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 峯 陽一

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 内藤 正典

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 小山田 英治

要 旨：

2011年7月11日午後2時30分より3時40分まで、3名の審査委員と学位申請者の平野克己氏の間で公聴会形式の口頭試問を行い、申請者の学力を確認した。申請者による論文内容の40分間のプレゼンテーションを受けて、およそ30分間の質疑応答を実施した。

審査委員からは、アフリカ農業と政策提言の関連、内外のアフリカ援助政策の背景と最新動向、援助政策形成のダイナミクス、NGO・市民社会の位置づけなどについて質問が出されたが、申請者はすべての質問に対して、これまでの学識と実務経験にもとづいて即座に的確に回答した。本論文のコアである開発経済学とアフリカ地域研究の方法論に関して、申請者が十分な力を有していることが確認できた。また、活発な質疑応答を通じて、歴史、思想史、政策評価といった分野においても非常に深い知見を有しておられることがわかった。総合学としてのグローバル・スタディーズの博士を授与するのにふさわしい申請者の学識を確認することができた。

語学に関しては、申請者はすでに英語圏の定評ある学術出版社から編著を出版し、英語論文を何本も執筆しているだけでなく、英語圏のJETROヨハネスブルクセンター所長として国際的な業務に従事してこられたことから、申し分のない英語力を身につけておられることは明らかである。今回はそれに加えて、詳細な質疑応答から、欧文・和文の広範な学術文献を縦横に読みこなして論文を執筆しておられることが確認できた。

以上より、本学位申請者の専門分野に関する学力および語学力は十分なものであることが認められた次第である。

博士學位論文要旨

論文題目： アフリカ問題 - 開発と援助の世界史

氏名： 平野 克己

要旨：

本著作は、世界の開発関連学界のみならず G8 サミットにおいても毎回議論されてきた「アフリカ問題」と呼ばれる世界的課題の全容を、その歴史的な形成過程を含めて明らかにすることを目的とした。アフリカ問題は単にアフリカの貧困問題であるにとどまらない。それは、第二次世界大戦後の世界にビルトインされた国際開発という命題が、開発思想の変遷と開発援助政策の史的展開の末に辿り着いたグローバルイシューなのである。

第1章「開発思想の誕生」では、帝国主義の崩壊によって生まれた国際的空白を、旧植民地新国家における「開発」という思想と、先進諸国における開発援助という新政策が埋めていった歴史的経緯を説明する。誕生当時の開発思想は経済学であるよりも国際政治を中心的な活動領域とし、ラテンアメリカを出生地とする「南北問題」というフレームに結実した。一方援助政策においては、イギリス、フランス、アメリカ、そして日本はそれぞれに異なる発祥をもち、ときに対立さえした。開発援助政策は、政府開発援助（ODA）という資金移動形態が成立する以前の出生の秘密をみなければ、その本質はわからないのである。

さらには、南北問題の基軸テーマが貿易にあったことが重要である。開発途上国が輸出する一次産品価格を国際政治によって人為的に引き上げ管理することを究極の目的とした南北問題の議論は、1970年代石油危機によって奇しくもその目的を達するのだが、そのことによって却って、開発思想としては瓦解していく。石油危機は原油の独歩高となって南側における資源輸出収入の著しい偏りをもたらし、その原油においてさえ価格管理に失敗したのであった。戦後の資源価格は1970年代と2000年代の二度にわたって高騰した。資源価格の高騰期と低迷期とでは世界経済および開発途上国世界の経済状況が大きく異なる。開発思想も劇的な変化を免れなかった。

第2章「南北問題からアフリカ問題へ」は、その開発思想の変化を説明する。1980年代以降の資源価格低迷期に製造業製品輸出によって急成長した、その後 NIES と呼ばれることになる開発途上国の一群の登場が、開発思想が変化する契機となった。先進国で NIES 研究が始まり、その成果は輸出指向型工業化論、あるいは「開発の政治経済学」として結晶していった。開発は、開発途上国が南側諸国として一体となった国際的枠組みで起こるものではなく、正しい政策を遂行できた国がその報酬として手にすることのできるものとして捉えられるようになり、先進国出自の、経済学の方法論を用いた政策選択の議論に変わったのである。開発の政治経済学は、NIES が台頭する一方でマクロ経済パフォーマンスを急速に悪化させていくサブサハラ・アフリカ救済の処方箋として、世界銀行を中心に「構造調整援助」へと収斂した。1970年代に一旦縮小した ODA は、サブサハラ・アフリカに対する構造調整援助をメインストリームとすることでふたたび増額されていく。かつて南北問題の名で語られてきた国際開発のさまざまな論議は、80年代以降、今度は「アフリカ問題」というフレームのなかに収容されていくのである。

ところが大量の ODA 投入にもかかわらずサブサハラ・アフリカの経済低迷はいっそう深刻化していった。アフリカでは1人当たり GDP が絶対的貧困水準を下回る国が増え、「貧困問題のアフリカ化」が進行した。アフリカ問題の深刻化につれて構造調整の成否が問われるようになり、1997年アジア通貨危機で IMF がとった政策が批判を集めたことで世界銀行は政策改変に追い込まれ、構造調整政策は少なくとも政策名としては退場する結果となった。アジア NIES の分析において開発における政府の役割をきわめて重視していた「開発の政治経済学」が、教条的市場主

義や「ワシントン・コンセンサスの走狗」という汚名を着せられた構造調整政策とともに開発処方箋として消滅したことは皮肉であり、アフリカ問題がいかに解き難い難問であるかを物語るものでもあった。

その難問と格闘するなかで、ミクロ経済学の手法を使った開発ミクロ経済学や、政府の行動を分析する新政治経済学が誕生し、これらが現在の開発経済学の最前線を構成している。開発経済学はまさに、アフリカ研究とともに進展してきたのである。

第3章「アフリカ農業とリカードの罨」と第4章「農業と工業をむすぶ貧困の連関」は、アフリカ問題に対する著者の解答案である。その要諦は、開発の政治経済学が見落とした経済史的側面、具体的には、産業革命に先行する近代農業革命の絶対的重要性をアフリカにおいて確認する議論である。サブサハラ・アフリカの食糧穀物生産は、世界においてただひとり近代農業革命の洗礼を受けていない。その生産性は世界平均の3分の1にとどかない。総労働力の60%を農業部門に投入しながらアフリカは東アジアと並ぶ巨大な穀物輸入地域となっている。弱い産業は豊富で安価な生産物を提供できない。アフリカの食糧価格はつねにアジアより高く、アフリカは高物価で高コストな社会になっている。ゆえにアフリカ諸国の平均賃金はアジアよりも高く、したがって労働に比較優位がなく、工業化がむしろ後退して失業が恒常化する。アフリカで起こっているのは製造業部門の後退と食糧輸入の急速な増大であり、貧困層の80%が低生産性の農村部に滞留している。

第5章「アフリカの成長反転」は、今世紀に入ってから資源価格高騰によってふたたび経済成長を始めたアフリカ経済の解説である。アフリカ経済の急成長を扱う文献は、開発経済学先端の視点では捉え難いこともおそらく影響して、開発学の分野からはいまだ発出されていない。経営学者による分析が主体だ。筆者は2007年まで南アフリカに駐在し、アフリカの激変ぶりを実見していたので、使命感に近い思いをもって本章を執筆した。本章では、資源価格がアフリカ経済のみならず世界経済にどのような影響を与えるのか、国際関係枠組みを変化させていくのかを論じた。昨今しばしば言及される「援助から投資へ」のシフトもその大きな流れのなかで起こっているものであり、日本の国益的課題もそこから発生している。20年以上にわたった経済低迷と社会混乱のなかですっかり疲弊したアフリカ経済社会で、にもかかわらず欧米企業や中国といった外資によるビジネス展開が急である。中国の高成長によって前世紀に勝る資源需要の膨張をおさえられない世界は、ついにアフリカをグローバル経済の一環に組み込んだ。その組み込みに伴う経済の作り変えの過程で、アフリカは中国並みのスピードで経済成長しているのである。

第6章「アフリカ問題の新しい展開」は、そのような新状況を踏まえた開発援助政策、対アフリカ政策のあるべき姿を展望する。50年におよんだ開発思想の変遷と援助政策の展開を世界史として眺めるとき、通常の開発論や援助論とは異なる実相がみえてくるはずである。実相を踏まえた議論と国益に対する明晰な認識が、われわれの国際開発観や援助政策をより安定的なものにしてくれる。従来にないオリジナルな援助論を展開したつもりである。

本書は、アフリカを扱いながら議論の射程は、国際開発の歴史と援助の世界史にどうしてもおよぶものとなった。くわえて、急成長するアフリカ経済の現状を解説する数少ない書物ともなった。それゆえか、歴史学を専門とする研究者とビジネス界から多くの反響を頂戴した。著者の望みは、開発や援助の議論を業界の議論にとどめないために、社会科学の視線が到達しうるかぎりの視界の広がりを提供することであった。地域研究は、政治学や経済学のみならず歴史学や人類学を含めた学際を宿命とし、専門地域を超えた空間視野の広がりを迫られる。グローバル化が進むほどその要請は強まっていくのである。アフリカ研究は、アフリカ経済のグローバル化とともに、ようやくにしてその要請をまのあたりにしている。今後アフリカ政策や援助を論じようとする試みは、アフリカ経済の主導権を握るにいたった企業の戦略や、巨大なプレイヤーとなった中国の政策動向に対する目配せを避けては通れない。これまでのアフリカ研究にはなかった、この

ような変数を取り込むための導きを、本書において示したかった。いささか逆説的に響くかも知れないが、地域研究が地域に逼塞すれば地域を見失うことにもなりかねない。研究対象地域がグローバル化するならば、地域研究も当然グローバルな視野をもたなくてはならない。アフリカが問いかけているのは世界のあり方なのである。